

疲れ果てて

重い身体を引きずり
やっとの思いで
寝台に横たわる
目をとじて微睡めば
日射しの鋭い
太陽の記憶

キラッと光る
ナイフのような日射しは
私の肌を突き刺して
最もやわらかい心底まで
深く深く突き刺す

そのおかげで私の意識は
疲れ果て
炎天下の町を
青白い幽霊のように
ゆらゆら
ゆらゆら
寄る辺なく彷徨う

甘美な月夜

コバルトブルーの夜空に
大きな裸電球のような月が
浮かんでいる
光は遠くの地平の果てまで照らし
明るい静寂を放っている

鳥も草木も
アトリエの詩人も
みんな静かに目をとじて
さらさらと降ってくる
金色の月の砂
神秘的な青色に
耳を傾ける

私はクロネコのように
そつと忍び寄り
金色の砂山に手を入れる
あまりの心地良い冷たさに
私の身体は溶け出して
染み込んでいく
上も下も無く
内も外も無い
あなたもわたしも無い
全ては溶け合い
交じり合う

そう、神が世界を創る
以前のように。

裏路地

お昼時の裏路地には
生活がある

家々の台所の窓から

茶碗の喜ぶ音が聞こえ

美味しそうなみそ汁の香りが
漂っている

路地の両脇には

家々で育てられた

草花が大ききれいに

鉢に入って並んでいる

特別な花などはないが

以前から知っている親しみを
私に向ける

こういう幸せな路地が

たくさんあつて

そのまた向こうにも

たくさんあつて

地平線の向こうまで埋めている

時々、私もこういう路地に

迷いたくて

野良ネコの後をついて行く